

平成 28 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

地域や関係機関及び府立なにわ高等支援学校との連携を深める中で、自ら学ぶ、健康で心豊かな子どもを育てる学校をめざす。

1. 児童生徒にとって、楽しく“行き(生き)がい”のある学校
2. 「できる」喜び、「わかる」喜び、「人の役に立つ」喜びを感じることができる実践をととして、児童生徒が「やりたい」気持ちを高めて成長し、将来の生活につながる学校
3. 地域の一員として認められ、地域とともに発展する、地域とつながる学校
4. 広大な校地校舎で児童生徒が生き生き躍動し、澁刺とした挨拶が飛び交う一人ひとりが輝く活気と潤いのある学校

2 中期的目標

1. 移転拡充後の変革期にある本校において、学校として体系的にかつ各学部が特色ある教育課程を編成する。
 - (1) 児童生徒も教職員も「やるぞ」と意気込む、特色ある教育課程を創造し実践に努める。
 - (2) 「生活につながる指導」「個別に指導内容を設定する指導」の観点から授業の充実を図る。
 - (3) 系統的で一貫性のあるキャリア教育の実践と就労移行の体制の充実を図る。
2. 広大な校地、校舎を有効に活用するなど、健やかな身体と豊かな心を育む教育の充実を図る。
 - (1) 運動経験を通して望ましい運動習慣を身につけ、健康的な身体づくりを行うとともに体力をつける。
 - (2) 安全、安心な学校づくりに努める。
 - (3) 自己有用感や自己肯定感を高める指導の充実を図る。
3. 地域に学び、地域とともに発展する学校として地域に開かれた学校づくりに努める。
 - (1) 地域との交流及び共同学習の推進を図る。
 - (2) 地域や関係諸機関と連携し、登下校時や非常時の安全確保の徹底を図る。
 - (3) 特別支援教育における地域のセンター校的役割として、巡回相談や支援教育に関わる情報発信の充実を図り、多種多様なニーズに応える支援体制の構築に努める。
 - (4) 学校ホームページの充実を図る。
4. 学校の組織力と教員の指導力の向上
 - (1) 学部や分掌間の連携の強化による学校運営の推進に努める。
 - (2) めざす学校像、学校教育目標に沿った研修テーマを設定し、研修の充実を図り、教員の指導力向上に努める。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 29 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>■児童生徒（回答数 161 人[回答率 62%]小 10 人、中 56 人、高 86 人 不明 6 人）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学校は楽しいですか？」では、肯定的回答率が 74%であり、「わからない」が 13%であることをふまえても、決して高い率とは言えない。今後、課題検証が必要となる。 ・「学校での勉強はわかりますか？」では、肯定的回答率は 63%、「わからない」と「未回答」を併せて 20%となっている。 ・「先生は話をよく聞いてくれますか?」、「先生はやさしいことばづかいで話してくれますか?」では、肯定的回答率がそれぞれ、69%、63%となっている。否定的回答率は、それぞれ、6%、10%であり、傾聴の姿勢、言葉づかい等で改善すべき点があると考ええる。 ・「校外学習、修学旅行や宿泊学習は楽しいですか」では、「はい」が 85%、「いいえ」が 6%、となっており、子どもたちに学校行事に対する一定の肯定感があることが分かる。 <p>■保護者（回答数 176 人[回答率 68%] 小 22 人、中 60 人、高 90 人、不明 4 人）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子どもは学校へ行くことを楽しみにしている」では、肯定的回答率が 86%、否定的回答率は 9%である。児童生徒の回答と比較すると肯定的回答率が 12%高いとはいえ、否定的回答率が 9%となっていることを受けとめる必要がある。 ・「子どもは授業がわかりやすいと言っている。もしくは、楽しいと言っている」では、肯定的回答率 68%、否定的回答率 11%、「わからない」20%となっている。肯定率が低いことをふまえ、今後の授業充実に向けた方策が必要である。 ・「学校は子どもの健康や安全について十分に配慮・対応している」では、「肯定的回答が 92%と高く、安全で安心な学校づくりでは一定の評価を得ている。 ・「教職員は子どもの発達段階に応じて、自立と社会参加に向けた生きる力をつける教育（キャリア教育）を推進している」では、肯定的回答率 69%、否定的回答率 14%で、今後のキャリア教育の在り方を検討する必要性があると考ええる。 ・「学校行事は子どもたちが参加しやすいように工夫されている」では、93%という高い肯定率であった。 <p>■教職員（回答数 126 人[回答率 100%]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子どもの実態に応じた、専門性のある授業を行っている。」では、肯定的回答率 88%、否定的回答率 10%となっている。また、「児童生徒の障がいやその特性について理解している」では、肯定的回答率 91%、否定的回答率 8%となっている。授業等での児童、生徒、保護者の評価と比較して高い肯定率となっている。校長をはじめ、教職員が児童、生徒、保護者の評価を真摯に受けとめ、自らの指導、支援を振り返り、改善をする姿勢を持つことが極めて重要である。 ・「教育活動全般において、児童生徒の人権を尊重する姿勢で指導を行っている」では、肯定的回答率 90%、否定的回答率 9%とであるものの、今年度の体罰事案をふまえ、子どもの気持ちに寄り添う教育の更なる推進を進めていきたい。 ・「校長は学校経営について考え方を明らかにし、リーダーシップを発揮している」では、肯定的回答率が 91%であったが、「学校運営に教職員の意見が反映されている」では、肯定的回答率が 76%にとどまる一方で、否定的回答率が 24%となった。今後、教職員が主体的に教育活動を進めることができるよう学校経営の方法を工夫していきたい。 ・「教職員間に信頼関係があり、意見を率直に言える環境、雰囲気である」では、肯定的回答率が 68%と低く、否定的回答率が 31%と高かった。チームで授業をはじめとする教育活動を進める支援学校にあっては、職員間の信頼関係を高めることは不可欠であり、今後、健全な相互評価や意見交換ができる職員集団となるよう学校経営を進めていきたい。 	<p>第 1 回学校協議会（6 月 28 日開催）における意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域や関係機関等との連携について <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の移転拡充は児童・生徒、保護者、教職員にとって大きな変化となった。地域の学校として地域に根差した教育活動の充実を願う。 ・子どもたちにとって、卒業後も安心して生活支援や福祉サービスを受けられることは大きな意味がある。それぞれの地域において児童生徒も保護者も安心して暮らせるよう、地域住民や公私の社会福祉関係者がお互いに協力して地域社会の福祉課題の解決に取り組む姿勢が必要。 ○教育環境の充実、専門性の向上等について <ul style="list-style-type: none"> ・「難波支援」と「なにわ高等支援」の併設では、特色も違えば目的も違う中で、お互いを尊重しあい、お互いに子どもにとってプラスとなる関係になることを願う。 ・子どもの障がいの状況は大きく様変わりした。今後の指導・支援にあり方が教員・学校全体の大きな課題である。そのためには校内の研究機関を中心に、児童生徒に対する情報の共有ときめ細かいアセスメント実施が必要となる。 <p>第 2 回協議会（12 月 13 日開催）における主な意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ○校長の学校経営等について <ul style="list-style-type: none"> ・教育ビジョンを示す強いリーダーシップを発揮してもらいたい。 ・難波支援となにわ高等支援が共催した「なんば・なにわ祭」では、今後は、両校のそれぞれの内容（今年度：舞台発表、模擬店）を広げていくことも必要ではないか。 ・「開かれた学校づくり」を進めてほしい。地域の人々の中には、先生と情報交換したいと願う人も多い。 ○体罰事案（7 月）について <ul style="list-style-type: none"> ・子どもや保護者の心情を思うと、とてもつらい出来事だった。これからの教育活動では、子どもの心に寄り添うことを大切にすることを願う。 ・体罰事案を受けての第 2 回の保護者説明会では改善のごたえを感じた。 <p>第 3 回協議会</p> <ul style="list-style-type: none"> ○交流について <ul style="list-style-type: none"> ・学校間の交流では成果があると思うが、子どもたちの卒業後をみすえ、例えば放課後デイサービス事業所等との情報共有の充実など、子どもにとって具体的な情報共有の場となるような交流も検討してはどうか。 ○キャリア教育について <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアプランニングマトリックスは興味深い。今後の状況を注視したい。 ・キャリアプランニングマトリックスを作成することが目的ではない。発達の視点や子どもの実態に即した指導・支援につながらなくては意味がない。 ・職業コースでは、高等部全体が職業コースという考え方で良いのではないかと。その中で自分にあったコースを選ぶという方法も良いのではないかと。 ○教員の専門性について <ul style="list-style-type: none"> ・自己診断の専門性に関する教職員の否定的な回答が 8%あったが、やはり肯定的回答が 100%であってほしい。 ○その他 <ul style="list-style-type: none"> ・ホームページの更新では、学校行事などの情報をできるだけ早く掲載してほしい。 ・なんば・なにわ祭では、子ども同士の交流が少なかった。相互に交流できるような内容を検討してどうか。 ・先輩たちの卒業後の生活の様子などを保護者に伝えることで、今、何が必要かを考える機会となるのではないかと。

府立難波支援学校

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価 (12月13日時点)
<p>1. 学校として体系的にかつ各学部が特色ある教育課程を編成する。</p>	<p>(1) 特色ある教育課程を創造し実践に努める。</p> <p>(2) 「生活につながる指導」「個別に指導内容を設定する指導」の観点から授業の充実を図る。</p> <p>(3) 系統的で一貫性のあるキャリア教育の実践とその充実を図る。</p>	<p>(1) ア 小学部では、基本的な生活習慣を確立し、「学校が楽しい」という思いを育てる。 イ 中学部では、体験を重視し、生活につながる力を身につける。 ウ 高等部では主体的に行動を選択できる力をはぐくむために、販売学習と選択制授業を充実させる。 エ 教育課程検討委員会を設置し、学部間の特色に系統性を持たせる。また、高等部においては職業コースの設置に向けた検討を進める。</p> <p>(2) ア 生活につながる指導実践及び、教材・教具の工夫・開発について研究する。 イ 全校で ICT を活用した授業実践、教材・教具の工夫・開発について研究する。</p> <p>(3) ア キャリア発達の諸能力（人間関係形成・情報活用・将来設計・意思決定）を整理し、各学部における課題を明確にした実践に取り組む。 イ 校内実習、現場実習、現場体験実習の在り方を見直し、実態に即した実習体制を構築する。</p>	<p>(1) ア 日々の学習の中で、朝の会や係り当番などで、人前に立つ取組を行うことで、自信をつける機会を増やす。また、運動会やなんば祭などの行事においては、いきいきと活動に取組める場面を設定する。 イ 外部講師を招聘した出前授業を年間2回の実施を行う。 ウ 販売活動を意識した作業学習や選択授業を、年間を通して計画的に実施する。アンケート集計にて、作業学習では生徒60%以上、選択授業では生徒70%以上が達成感を得られることをめざす。 エ 教育課程検討委員会を月1回開催し、特色ある職業コースの取組みを検討する。</p> <p>(2) ア 「生活につながる指導」「個別に指導内容を設定する指導」について重点的に研究する。 イ 端末等、活用研修を学期に1回、開催する。</p> <p>(3) ア・中学部生徒の高等部校内実習への参加を2回実施する。 ・高等部生徒全体の企業外部講師による出前授業を昨年度より1回(20%)増やす。(平成27年度は3回) イ 中小企業家同友会や、関係諸機関と連携し、実習・雇用先の新規開拓を進める。特に事務系の実習先を昨年度以上に増やす(平成27年度は5社)。</p>	<p>(1) ア 朝の会等での日常的な自己肯定感につながる役割を果たしている。運動会の学部競技、なんば・なにわ祭では演劇を披露(○)。 イ 外部講師による授業は未実施。(△) ウ 販売学習及び作業学習は計画的に実施。11月にビッグアイで開催の「ともに生きる障がい展」に出品。選択授業等における生徒の満足度は、92%であった。(◎) エ 7月～9月の教育課程検討委員会は開催できず。その後は予定通り開催。職業コースの平成30年度設置を見すえ、協議を継続。(△)</p> <p>(2) ア 各学部、学年ごとに「個別の指導計画」等の事例検討を実施し、今後の指導・支援につなげることができた。(○) イ 今年度実施できず。(△) 次年度以降は、ICT機器の活用度を高めていきたい。 (3) ア ・中学部2、3年生が高等部校内実習に参加体験し、作業内容等についての理解を深めたものの、後期だけの1回実施となった。(△) ・企業外部講師授業4回実施(○) イ 1月現在4社(△)。次年度から高等部2年生の現場実習を前期から導入する予定。</p>
<p>2. 健やかな身体と豊かな心を育む教育の充実を図る。</p>	<p>(1) 運動経験を通して望ましい運動習慣を身につけ、健康的な身体づくりを行うとともに体力をつける。</p> <p>(2) 安全、安心な学校づくりに努める。</p> <p>(3) 自己有用感や自己肯定感を高める指導の充実に努める。</p>	<p>(1) 体力の向上に向け、学校生活全体で運動する機会を設定する。(広大なグラウンド、体育館を利用したランニング活動等)</p> <p>(2) ア けがの防止、病気の予防をはじめ、清潔の保持等への教職員の意識を高め、学校全体の取組として、健康教育を進める。 イ ヒヤリハット事例に基づき、教職員で情報の共有化を図るとともに、教職員の意識と指導力を高める。</p> <p>(3) 広い舞台と席数のある講堂を有効に活用した文化的行事を開催する。</p>	<p>(1) 体育科と連携をとり、学校活動全体で体力を高められる運動や、体力の向上を図る機会を実施する。</p> <p>(2) ア 事故件数の減少。 学校感染症蔓延の防止。 清潔度チェック9項目のうち、全項目で「できている」を80%以上にする。 イ ヒヤリハット事例の定着と研究・研修会(年に1回)開催。 教職員の危機管理に対する意識の向上に取り組む。</p> <p>(3) 講堂の有効活用は文化部と連携して取り組む。アンケートを取り、有効に活用されたかを検証する。満足度を70%以上にする。</p>	<p>(1) 耐寒訓練(ランニング)、マラソン大会を計画通り実施。各学部で、体育館を活用したジョギング、プレイルームの活用など体力向上の取組を計画的に実施。生涯スポーツの基礎にもつながった。(○)</p> <p>(2) ア・7月に体罰や不適切な指導があり、安全で安心な学校づくりと相反する状況となった。深い反省のもと、「子どもを主語」にする学校づくりを教職員とともに進めている。(△) ・清潔度チェックでは、4月、6月、9月、11月、1月のすべてのアンケートにおいて「手洗い、うがい」「ハンカチ、ティッシュの持参」が80%未満。今後も徹底指導を継続して行う。(△) ・校医による歯磨き指導を計画的に実施するなど、実践的な取組を行った。(○) イ ヒヤリハット事例研修実施(12月)、緊急事態を想定したシミュレーションを全学部で実施(1・2月)。緊急体制についても見直し作業中。(◎)</p> <p>(3) ・「なんば・なにわ祭(12月開催)」で舞台発表(全学部)、「難波支援」と「なにわ高等支援」両校の生徒による太鼓演奏を行い、地域の産業である皮革の歴史なども紹介し、好評を得た[12月]。芸術鑑賞(太鼓演奏)[12月](◎)。今後も地域との連携を深めていくことが重要。 ・本校卒業生でパラリンピック銅メダリストの津川拓也さんとの交流会開催(スポーツ庁行事)[1月]。児童生徒の自己肯定感にも結びついた。(○) ・講堂の有効活用についてのアンケートにおける肯定的回答(満足度)79.8%。(○)</p>

府立難波支援学校

<p>3. 地域や関係諸機関と学び、ともに発展する学校として開かれた学校づくりに努める。</p>	<p>(1) 地域との交流及び共同学習の推進を図る。</p> <p>(2) 地域や関係諸機関と連携し、登下校時や非常時の安全確保の徹底を図る。</p> <p>(3) 特別支援教育における地域のセンター校的役割として、巡回相談や支援教育に関わる情報発信の充実を図り、多種多様なニーズに応える支援体制の構築に努める。</p> <p>(4) 学校ホームページの充実を図る。</p>	<p>(1) ア 地域の保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、支援学校と直接的な交流及び共同学習を実施する。</p> <p>イ 校地、校舎を共有するなにわ高等支援学校との協力、連携に努める。</p> <p>(2) ア 通学バスの安全で確実な運行体制を確立する。</p> <p>イ 通学路の点検・確認を行い、登下校時の安全を確保する。</p> <p>(3) 障がいのある幼児、児童生徒及び保護者に対する教育支援、相談支援に努める。</p> <p>(4) 学校ホームページを作成し、日々の教育実践を公開する。</p>	<p>(1) ア 交流校の開拓及び内容を深める。交流校数を昨年度より増やす。(昨年度4校)。具体的な内容として、文化的行事を交流及び共同学習の中核に位置づけ、参加児童生徒及び教員の肯定的評価を80%以上にする。</p> <p>イ 月に1度、なにわ高等支援学校との充実した連絡会議を開催する。また、共催の行事を1回以上開催する。</p> <p>(2) ア 行事や変則的な時間割の際には、職員朝礼にて不乗届の周知を徹底する。通学バスのトラブル事例を集約し、今後の対応策に向け分析を行う。</p> <p>イ 通学時の事故、トラブルに地域の見守りと連携を取り、学校組織が迅速な対応ができていくか検証を行う。</p> <p>(3) 支援先の学校園にアンケートを行い、「支援内容は要望に沿うものであった」という項目に対して、「おおいにそう思う」「少しそう思う」と答える割合を3%増やす。(平成27年度は93%)</p> <p>(4) 学校ホームページを行事終了ごとに更新する。</p>	<p>(1) ア・浪速区第5保育所、大阪市立塩草立葉小、栄小、木津中、難波中、築港中(5校)と交流を行った。とりわけ小学部と地域の小学校との交流(主に文化的行事)機会の拡大に成果があった。(○)</p> <p>・アンケート項目「交流事業がたのしかった」の児童生徒の回答では、「わからない」が52%と大きな割合を占めた。「わからない」を除く肯定的回答率は87.5%であった。アンケート実施時期(2月に他項目と併せて一括実施)等を改善する必要がある。(△)</p> <p>イ 連絡会議は予定どおり開催。「なんば・なにわ祭」、「販売学習」を共同開催し、両校の交流及び連携の充実を図ることができた。次年度以降も機会の拡大を図るなど、交流会を拡大する。(◎)</p> <p>(2) ア 予定通り実施するものの、不乗車届の徹底には至らなかった。(△)</p> <p>イ 実施済み。臨機応変に情報を共有し状況に応じて登下校指導を実施。登下校の危機管理体制としても機能している(◎)</p> <p>(3) 「支援内容は要望に意向に沿うものであったか」に対する肯定的回答割合100%となったが、校内委員会の充実など、さらなる支援体制の強化が喫緊の課題(○)</p> <p>(4) ・更新を実施するものの、学校協議会のご意見をふまえ、今後は、校内研修のページを増設するなど、更新頻度も含め、発信内容の充実が必要。(△)</p> <p>・保健室ブログを開始(12月～)</p> <p>・ホームページ一部改訂(1月)</p>
<p>4. 学校の組織力と教員の指導力の向上</p>	<p>(1) 学部や分掌間の連携を強化した学校運営の推進に努める。</p> <p>(2) めざす学校像、学校教育目標に沿った研修テーマを設定し、研修の充実に努め、教員の指導力向上に努める。</p>	<p>(1) 移転拡充後の本校の実態を考慮し、業務を整理するとともに“仕事の見える化”に努め、学校運営の基盤をつくる。</p> <p>(2) ア 専門性の高い教員や外部の専門家の積極的な活用をととして、教育力を高める。</p> <p>イ 授業研究をはじめとした校内研修や府及び市教育センターの研修、文化的行事を含む各種行事や交流及び共同学習等を活用して、児童生徒のコミュニケーション能力の向上に資する教員の実践的な専門性を高める。</p>	<p>(1) 校務分掌組織で「資料が整理できているか」「データの整理ができているか」「引き継ぎ資料が整っているか」という視点で問いかけ検証を行う。</p> <p>(2) ア 児童生徒の実態に即した研修内容(平成28年度の研修テーマは「児童生徒がわかる授業づくり」)の充実に努め、研修参加人数を30%増加させる。(昨年度50人)</p> <p>イ 障がい特性及び発達過程に関する理解を基盤とした専門性向上の指標として、教職員にアンケートを実施し、目標値を設定する。</p> <p>① 授業研究や校内外の研修によって、「専門性のスキルアップが図られた」と回答する教職員の割合を80%以上にする。</p> <p>② 文化的・体育的行事や交流及び共同学習等を通じたコミュニケーションに関する指導・支援・工夫・配慮を行うことにより、教員の「専門性の向上に役立った」と回答する割合を80%以上にする。</p>	<p>(1) 現時点で未実施(年度末に実施予定)であり、十分な検証準備が進んでいない。(△)次年度は、分掌組織の改善(再編含む)を検討する必要がある。</p> <p>(2) ア 校内研修(5月1回、6月2回、7月5回、8月1回、10月1回、11月1回、12月1回、1月1回、2月1回)。「アセスメント」「子どもの人権尊重」「授業改善」「実践授業」等をテーマに実施。参加人数(のべ310人)(◎)</p> <p>イ 上記の校内研修と併せて授業研究等を実施したが、下記のアンケート結果にも見られるように、教職員の研修等に係る肯定感が高いとは言えない結果となった。OJT等による実践的な専門性向上の仕組み等について今後検討する必要がある。</p> <p>① アンケート項目「専門性のスキルアップが図られた」の肯定的回答57.14%(△)</p> <p>② アンケート項目「専門性の向上に役立った」の肯定的回答率60.7%(△)</p>